第 16 回 木曾三川下流域自然再生検討会 議事概要

日時：令和 5 年 12 月 21 日（木）10：00～12：00

場所：木曾川下流河川事務所 1 階会議室および WEB 会議

1. 開会
2. 開会挨拶（木曾川下流河川事務所長）
3. 座長挨拶
4. 委員の紹介
5. 議事

1) 規約改正

- ・規約改正について、事務局から説明がなされた。
- ・本検討会委員への就任が承認された木村妙子氏及び栗田泰男氏から挨拶を頂いた。

2) 自然再生計画書の変更案について

① 第 15 回自然再生検討会における主な意見と対応方針

- ・第 15 回自然再生検討会及びその事前ヒアリングにおける主な指摘事項について、事務局からそれらの内容と対応方針の説明があり、対応方針が了承された。

② 第 5 章 再生の内容について

- ・自然再生計画書「第 5 章 再生の内容」について事務局から説明があり、以下の質疑内容を踏まえた検討や修正等を加えることで再生の内容が了承された。

質疑の概要

- ・湛水環境の現状整理のうち、資料 2-3 の P. 17 に生物種のリストがあるが、外来生物は見られていないのか。
→ 資料 2-3 の P. 17 の一覧は、重要性、典型性（確認地点が減少している種）、特殊性の観点での整理となっており、外来種は掲載していない状況である。河川水辺の国勢調査等では、ヌートリアやブラックバス等の外来種が確認されている。【事務局】
- ・外来生物にもワンドやヨシ原などの良好な環境を好む種も多くいる。自然再生にあたっては外来生物も考慮したほうが良い。在来種の生物多様性の増加を妨げる場合もあるので、その対策を考える上でも外来生物は入れて認識をしておいた方が良い。
- ・カワヒバリガイは現状どうなっているのか。本地域では、シジミが重要な対象生物となっているが、シジミ等に影響を与える種はいるか。
→カワヒバリガイの調査を行ったのは昔であるため、現状の把握ができていないが、かつて長良川河口堰付近で調査した際はせせらぎ魚道で多くの個体が確認された。その環境が維持されているのなら、現在も生息していると考えられる。
→シジミについては、タイワンシジミが一番問題になるかと考えている。マシジミと記載されている種は、タイワンシジミである可能性がかなり高い。また、水揚げされたヤマトシジミの中にもかなりのタイワンシジミの混入が確認されている。ヤマトシジミとタイワンシジミが交雑するという事は多分ないが、競合する可能性はある。
- ・外来生物、特に特定外来生物については、しっかりと意識して対策を行っていただきたい。揖斐川ではコクチバスの拡散が問題となっており、岐阜県でも駆除を実施する計画が進められている。今後、県との連携も必要になると考えられる。また、環境省からの情報提供となるが、揖斐川で特定外来生物であるオオバナミズキンバイが確認された。最新の情報も含めて外来生物の視点は重要と捉えている。
- ・オオクチバスやコクチバスに対して〇〇〇〇としてどのような対応を実施されておられるのか、

ご教示をお願いしたい。

→バスは駆除したいと考えているが、〇〇〇〇だけでは結論を出せない問題であると考えている。

- ・海津漁協が採取しているのはマシジミと呼ばれているものである。マシジミとタイワンシジミの特徴についての情報を提供いただければ、実際に採捕したものと比較したいと考えている。
- ・今回議題に上がった浅場やヨシ原の再生は、将来の子供たちのためにも残すべき環境であり、非常に良い取り組みであると考えている。
- ・再生の内容は、河川毎に河川環境の特性や状況を踏まえた重点メニューが設定されており、以前より再生の課題や目標が明確になったと感じる。揖斐川のメニューがクローズアップされていて、結果が出やすいような印象を受けた。一方、長良川の湛水環境は人工的なものであり、どのような環境目標とするのかはもう少し整理が必要かと思う。
- ・長良川のヨシ原再生を続けていくのであれば、ヨシの遺伝的な多様性を考慮いただきたいと考えている。長良川はすでに淡水化しており、上流に生育する淡水性のヨシを導入するなどの適切な対応が必要である。
- ・浅場再生では、干潟の先が非常に深くなっている箇所に土砂を投入するということであるが、やはり深くなっている箇所は流れによって浸食されて生じていると思われる。ただ単に砂を入れるだけではまた流されてしまう恐れがあるため、場の状況を考慮しながら進めていく必要がある。簡単な方法で、土砂が流出しないような対策はしたほうが良いと考えられる。
- ・土砂の移動は底面の流向に影響されるため、流れで運ばれてくる土砂を溜めるバープ工のようなものを水制に加えて設置できると良い。
- ・付録資料 2-3 の P. 15 の地盤高の変遷を見ると、湛水域と言いつつ、河道形状は変化している。水際の整備を想定する場合、深掘れしている箇所での整備は難しいため、自然状態で河床や河岸がどのように変化しているかを見て、整備箇所を検討していく必要がある。
- ・干潟や浅場は一体的に再生を進めていくものだと考える。他地域の良好な干潟では、干潟の中に滯筋や後背湿地などが形成され、多様な環境となっている。本再生においても干潟の中に滯筋を作るなど多様な環境を創出することや高さの多様性を出すことも検討するとよいのではないか。
- ・浅場の範囲を T.P-0.6~-2.0 と決めているが、もう少し幅広に設定しても良いと考える。また、今後整備箇所の選定を行っていくと思われるが、実施箇所の数や延長だけではなく、どのぐらいの面積が再生されるのかも踏まえて、検討を行う必要がある。
- ・イメージ図は横断面だけではなく、3 次元的な表現で認識共有を行うことができると良いと考える。
- ・浅場再生にあたっては、水制の形状を変えるなどの工夫は行うのか。横断面だけではなく、3 次元的にイメージを示す必要があると感じる。
- ・湛水環境の目標には、生息・生育場だけではなく、繁殖場についても整備ができるように記載を改めていただきたい。また、特定外来生物の対策を講じながら、事業を実施していくことについても整理しておくとして、整備目標には、外来種の対応も入れるべきではないかと考える。また、物理的な環境についての考慮だけでなく、生物的な環境も入れておいて欲しい。

③ 第 6 章 保全の内容について

- ・自然再生計画書「第 6 章 保全の内容」について事務局から説明があり、以下の質疑内容を踏まえた検討や修正等を加えることで保全の内容が了承された。

質疑の概要

- ・干潟を効果的に再生していくには、潮汐の影響が顕著である場所で事業実施する必要がある。上流で再生をするのであれば、干潟ではなくヨシ原再生に特化するといったことが考えられる。
- ・水際環境 8 区分は過去から整理を行っているが、現況は過去と比較してどのぐらい変化してきたかについてご説明をいただきたい。
→今回の図は、令和 4 年度の環境基図調査結果を踏まえて更新した結果を示している。これまでの変遷については、整理した結果を改めてご報告したいと考えている。【事務局】
→水際環境 8 区分の変遷を比較することで、良くなったところ、悪くなったところの原因を明らかにできるのではないかと。再生や保全を検討する上での重要な情報となるため、整理を進めていただきたい。
- ・保全箇所のうち、工事が必要になる箇所について、工事影響を低減するという対応だけでは、

ネイチャーポジティブが取り上げられている社会情勢を踏まえると不十分であると考えられる。より環境を良くする、良い環境を創出していくという観点を前面に打ち出して計画書を記載いただきたい。

- ・ 保全の目標及び保全の内容（案）に記載する保全の実施内容についても、工事による影響の低減だけではなく、より良い環境を創出していく旨を記載いただきたい。
- ・ 保全目標に、「生物の生息・生育場を確保する」とあるが、生息・生育していればいいというわけではなく、繁殖場として機能することも重要であるため、「繁殖」という文言を追加いただきたい。
- ・ 揖斐川の支川の多度川と肱江川では、合流点やその上流区間で多くウナギが確認されている。本川や支川と堤内側との繋がりも考慮しているニホンウナギ生態系ネットワーク推進部会との連携も視野に入れて、自然再生を進めていただきたい。

6. 情報提供（事務局）

1) ワンド再生箇所①、②における整備状況について

- ・ ワンド再生箇所①、②における現在の整備状況について、事務局から説明があり、以下の質疑がなされた。

質疑の概要

- ・ 工事用道路は残すということであるが、周辺の環境と調和するような配慮は是非していただきたい。

2) 自然再生計画変更に向けての今後のスケジュールについて

- ・ 自然再生計画変更に向けての今後のスケジュールについて、事務局から説明があり、以下の質疑がなされた説明を行った。

質疑の概要

- ・ 来年度に CVM 調査を行うとのことだが、アンケート範囲等の調査計画はすでに決定されているのか。
→実施範囲等、前回の CVM 調査と大きくは変わらないと考えているが、現在検討中である。【事務局】
- ・ 計画書の更新にあたっては、本日意見が上がったネイチャーポジティブの考え方や外来生物への対応についても適切に反映させながら、検討を進めていただきたい。

7. 閉会

以上